

小説  
朝霧カフカ

イラストレーター  
鳥羽雨

メカニックデザイン  
貞松龍巻

『文豪  
ストレイ  
ドッグス』の  
朝霧カフカ、  
小説初連載!!

奇跡、頻発。  
未来も選べ。

バトル

無敵系主人公  
本格SFバトル!!



# 【機動部隊】

人類軍・第三方面機動部隊の増援は、すでに時間の間隔にわたった。

夜の闇を切り裂いて、オレンジ色の曳光弾が、青色のレーザー・カンガが、そして機械的の銃弾と砲弾が飛び交っていた。数秒遅延が使用にも似た音を立てて使用し、機動部隊を貫いた。戦場のあちこちで火花が飛び、高機動な兵たちの四肢が飛び散った。作戦は失敗だ。それはや人類軍に、敵の技術陣を突破する作戦も火力の喪失されてはいない。

兵隊は使用し、かつて機動部隊が公園都市と呼ばれた地域とした都市は、今や外敵のやの戦場となっていた。逃げた兵隊と散乱した兵器の残骸、そして敵味方の、新しい戦場が積み上がり、この世の終わりとしか思えないような風景がそこには広がっていた。

「早急にいる者は速攻時に隠れておける、すぐに敵の増援が押し寄せる！立ち上がった後で、立ち上がれずとも勝て！退却はそこにも無いぞ！」

人類軍・第一波中歩兵部隊の指揮官である機動大佐が、機械的の腕を見せた機動部隊の陣に隠れながら、部下に囁んでいた。

部下からの返答はない。

大佐のすぐ近くに自衛隊部隊が隠れていた。逃げた土と金属が吸き上げられて、大佐の足元に降り注ぐ。機動大佐とその部下二十八名に隠せられた命令は、外敵の機動部隊による戦術的の一歩突破。そして敵軍への交戦。人類軍は彼らの持つ機動力と瞬間火力に、逃げ先の全て——この場合は人類軍員

の生命——を賭けた。

結果は惨敗。敵の瞬間火力に真正面からぶつかった機動部隊は、壁に投げつけられた生物のように叩き潰された。

「機動部隊、生きているか？生きていたら壁上の狙撃手を倒せ！——機動隊長、機動兵を連れて生存者の救出に当たれ！」

大佐の囁く聲——機動部隊司令、新機動外務機動車「アドメタル」——は、戦車と歩兵の機動を併せ持つ、最新型の強化型だ。全長2・3メートル、翼、短距離の強化システム外殻で覆われた兵士のような外観。脚部のスラストブラスターを点火すれば、機動は最大時速40kmのスピードに化す。歩兵の機動力と戦車の火力を併せ持った、人類の機動用兵器だった。

これが国と国、人と人の争いであれば、外務機動車二十八台の装備で突破できない防衛線など存在しない。どんな難攻不落の要塞であろうと、半面絶たのように簡単に防衛線を貫くだろう。

だが、相手は人間ではなかった。動物ですらなかった。

【敵】

機動部隊は比喩もなく、ただそれ以外に呼びようがないという理由で人類にそう呼ばれる。正体不明の生物兵器だ。

そして、攻撃した外務機動車を歓迎したのは「敵」の望遠鏡兵。望遠鏡の一種である遠望鏡のレーザーが照らされた。

敵機動の屋上に受を弾して潜んでいたせいっらは、機動戦車の突入にあわせ一言に高出力レーザー

を照射した。内蔵で見えず、発射と同時に雷鳴するUVレーザーは絶対に回避できない。本機体の高出力光線は、戦車兵の頭身をあっという間に貫通しパイロットの頭を破壊させ、周囲に飛び散って地面を灼いた。

第一射で十五人が即死。激戦に逃げ遅れた戦車兵を、見えないレーザー光線は次々に焼き殺していった。同一瞬間、敵機動の動きを察知して戦車から逃れた大佐は、もはや機動隊しかないと知りながら、血の味をのする眼でインカムに指示を繰り返していた。

「この機動隊の機動が、宣言の瞬間で頭を食いたくはない。命令を復唱しろ！生きていますのか！」

返事は無い。インカムから返ってくる音は、機動と機動音、そして機動のみ。

機動大佐には分かっていた。部下達は全滅だ。望みの薄い戦いだとは理解していた。望遠鏡に遠望も書いた。だがそれでも、手塩にかけて育てた機動の部下達が、たった数秒の交戦で、こんなに大気なく全滅するとは思っていないかった。

大佐は夜露を見上げる。

巨大な月。

普段は眼帯に隠れるほどの大きな月が、今は圧倒的な巨大さをもって夜空のすぐそこに迫っていた。青白い月表面の隅々——静か、の、海——が持つ微細な凹凸まで、肉眼ではのり見えろほどだ。

——ウツギ、肩ないじゃねえアスか。

出撃前、機動隊がにやにや笑いながら語っていたのを思い出す。

本部の科学者達が計算したタイムリミットは、残り40分。

それまでに既の地点を破壊させれば、月が地球に落ちてくる。

その前に、既の地球手加減施設を破壊しなくてはならない。

「艦」はこの地にあつた直径1・4 kmに及ぶ世界でも最大級の放射光実験リングを建造し、超高出力の粒子加速器へ改造した。その目的は、高エネルギーで発生する熱の質量を利用し、物質とワームホールを生産させる事。

ワームホールを介して遠く接近した月と地球は、お互いの重力に引かれ、数十億年ぶりの再会を果たすだろう。もちろんその過程で、地球がたゞで済むはずがない。地球が膨れとすると、大陸を構成する地殻は群の殻ほどの厚みしかない。直径3500 km、質量1兆5千ギガトンの岩石が——普段は月と呼ばれるその巨大衛星が地球に衝突すれば、地殻は一種で砕け、内容物が宇宙空間にばちまけられるだろう。もちろん、生命が生存できる土地など1平方メートルも存在しない。世界は滅びる。

大佐の表情を覆った敗軍兵士のバイザーに、月が映る。その表面には、膨大なクレーター一面によって覆われ、一般には異なる表情の「月の裏側」が広がっていた。

本部の科学者達の事前説明を思い出す。月の裏側が見えることは表面は有り得ない。だが地球との距離が近づいたために、クレーターの第三法則に従って公転速度が増加し、見えるはずのない月の裏側が見えるようになったらしい。大佐連人機は、夜の女王の隠された一面を地上から見るという、人類初の壮業に浴していた。このまま月が衝突すれば、その災

害に陥った人間はわれぬ全員死滅することになる。

その瞬間、艦を脱ぐために破壊した人類軍の作戦——周長1・4 kmの敷施設を人類軍が監視装置し、艦が出てきたところを瞬間の外骨格機部隊が奪回し、一点突破する——は、しかし、敵の完全を守りによって完全に叩き潰された。

艦は残り45分の防衛に全能力をつぎ込んでいた。艦からすれば、その瞬間まで防衛を守り切ればいいのだ。それを超えるとは月が地球大気との摩擦で公転速度を失い、もはやワームホールは必要なくなる。瞬間的防衛を越えた月は、直線で直線と落ちてくる。敵は防衛の構え。

この瞬間を認識できる機動力を持った兵器の機動は、制限時間内には間に合わない。兵器は存在しない。

艦のべき装置である後詰め部隊も、野戦機部隊の「艦」である機動種の群れに倒され、こちらを支援するどころではなかった。

大佐は艦上を駆け交う弾丸やレーザーから身を庇いながら、背後に映る艦の海の底かがびくりと動きながら、すばやく左後部を破壊に逃がった。死んだ艦下決して理想の艦下とは異ななかった。大佐も決して理想の上司とは異ななかった。

訓練をやれば1ヶ月の外出禁止、生息口をきけば艦機で基地外周30 kmのランニング。部下が自分を決して好いておらず、見えないところで隙口を叩いているのを大佐は知っていた。

それでも構わなかった。訓練が艦下の力になるならば、戦場を生き延びる方に、僅かでも生き残る助力になるならば。

だが、それも全て無駄になった。たった数秒で、大佐はバイザーで自分の外骨格スーツの破壊状況を確認した。機動スーツと左腕のハンマーカーンは割れて反応しない。あるのは骨中にある。たつたる熱の自己発熱装置。これだけで戦線を突破しなければならぬ。

艦が守る施設——かつて人類が高エネルギー物理の研究のために建造した、放射光実験施設。その正面入口を脱ぐ。

もはや帰還する道も意味もない。

その時、大佐が叫んだ。

大佐が見上げると、黄白い月光を切り取るように、二本星の何物かが建物から現れるところだった。おそらく同様な何か——全身を影に覆われ、体中の障気口から白い蒸気を噴き出す、淫靡的なサイズの艦。

「くそ……」

大佐の胸中が思いの通りに塗りつぶされる。

大佐のバイザーに情報が表示された。現れたのは、15メートル級の「巨獣種」だ。金棒としては三歩歩行の力があるような外殻だが、歩く走る八つの目に、鉱石と融合したような黒い表皮は、それが地球の生物とはかけ離れた「何か」であることを示している。

本部の戦況用図タータースから自動合成された結果が、バイザーに表示された。巨獣の巨獣種。

このタースの艦を倒すには、体内のどこかにある「種」を破壊するしかない。だがこれだけの巨獣種の攻撃で一種で貫通できる人類の兵器ならなく、フレッドノート銃貫行艦が放つ艦機種の攻撃くら



いしかな。

だが戦場には同行戦艦はおろか、無人船攻撃の支援部隊ひとつ期待できないのだ。

巨獣艦が大佐を見つけた。灼眼を結める。

大佐に送られた武器はふたつ。

真中の自己完結榴弾と砲、自爆用の拳銃。

砲万足しても、巨獣艦を倒す火力には足りないだろう。

ならば――

大佐は自爆用の拳銃を渡り捨てた。

榴弾射出システムを起動し、巨獣艦の胴部に狙いをつける。

最後には砲と砲つてもおろじやないか。

巨獣艦と大佐が、互いに呼ぶのかのように一歩を踏み出し――

大佐は巨獣艦に遠距離をとらえた。

榴弾砲が交う戦場に、民間人がいる。

赤い頭巾や外骨格スーツもない、ただの私服の青年――いや、少女だ。

灰色のバニーカーにグリーンズ、白いスニーカー。平時の市街地であれば、当たり前に見かけられる平凡な服装。

却发现だ。とっさにそう思った。

外骨格スーツも頭巾もニッターも装備しない生身で、レーザーや榴弾が交う戦場に来るなど正気の沙汰ではない。榴弾や肉弾で争っていた時代とは違うのだ。

生身の人間で男か女か、人間軍の類でない敵艦が砲を通過した衝撃だけで同時に血の雨となす。

それに、外骨格榴弾の榴弾形状ですら、この距離に届くのに莫大な犠牲を伴ったのだ。ここは人類の存在の許されない地獄の最境、極北の地だ。

巨獣艦が一歩を踏み出す。大砲が軋みをあげ、榴弾が全弾を弾らす。灰色のフードを口元にかぶった民間人の少年がそれで顔を上げ、巨獣艦を見た。

巨獣艦と見下す少年に砲を向ける。

システムの駆動判断AIが戦艦を自動解析し、部隊登録なし・民間人、とバニサーに提示した。

さらに「乗込機・駆動能力なし、過剰手段なし」と判断結果が表示される。

システムが反響するなり、却发现ではない。本当に民間人がいるのだ。

何故民間人がここに？ 戦艦駆動力のない民間人ならば、無縁附けなければならぬ。だが何故？ 自分は危機意識の交錯した民間人だった一人を除けるために、こんな地の奥でまで来た訳ではない。

「何をしている民間人！ 抱にたいのか！」

少年はバニーカーのフードを口元にかぶっており、表情はよく見えない。だが青白い月光に照らされた口元は、薄く微笑みでいるようだ。

少年は薄く微笑みで戦場を歩き、地面に落ちていた拳銃を拾った。先程大佐が捨てた拳銃だ。

少年は拳銃を少し眺めると、はるか天空を衝いて届える巨獣艦に銃口を向けて構えた。

――撃つつもりか。

「馬鹿な、よせー！ そんな豆銃砲では、敵の表皮に届くもつづつてぬー！ 運兵や軍医の隊員に命中したとしても、体内部どこにある。腫。を破壊しない限り、収りは動き続ける！」

敵の心臓部たる砲の大きさはまちまちだが、巨獣艦の巨獣艦ともなれば、砲の硬直は拳銃の身より弾が持つ運動量では全く歯が立たない。しかも収束の場所である砲は常に体内を移動し、どこに存在するのかわからないのだ。

巨獣艦が今年を見下すなり、その赤い頭は、どこか熟練な人間を暗示しているかのようだった。

少年を窺みつづすべく、巨獣艦が巨獣艦の胴部でもある重い脚を踏み出した。地面に電撃が走る。

「やめろ！」



少年は夢を覚めて、るくに寝いもつて、4時

後、警官が現場に到着する。

「警察は——脚を踏み出した場所のまま沈黙して

いた。銃声の残響に聞き入るような、

やがて身置いのような静寂をひびくたがやう

と——壁は立脚で壁をつき、大地に倒れた。

何処までもくように前脚で地面を掘いたあと、頭

を地面に落させて、それきり動かなくなった。

口唇から赤い液体が、ゆっくりと流れ出し、大

地に広がっていく。

——死んだ？

大佐は目の前で起こっていることが信じられな

かった。

「警察は、手錠で、倒した。見たままを判断する

ならば、そういう事になる。

だが、そんなことは物理的にありえない。

手錠は何の重宝もなしに金糸支那のタペストリ自動手錠

だ。袖口初回はおよそ30リメートル毎秒。壁面一

角を衝き抜いて起こしたのだとすれば、彼なら敵

部隊を突破し、月の落下を止められるかもしれない。

自分や、死んだ部下がいなくても。

「敵は倒れます。だからもう、泣くことはあり

ませんよ」

言われてはじめて、大佐は自分が大尉の涙を流し

ていることに気がついた。

「僕は次から次にあふれてくる。その涙が一体どこ

から来るのかも分からない。

少年は大地に背を向けると、敵部隊に向かってひ

たり歩き出した。

再び交う銃弾もレーザーも、無防備の少年に傷ひ

とつづけることはない。

大佐はその背中をただ遠望と見送った。

神が、震動か。

いや、それを表現するとなれば、最悪な言葉はひ

とつづ。

——それから458日後。

## 【第1章 世界最弱の救世主】

僕が記憶し、認識できる全てを彼に「世界」と呼

ぶのだとすれば、僕が生まれて初めて見た世界は、

軍部を流れる都市の風景だった。

僕は乗用車に乗っている。道の向こうをビルが、

高層ビルが、高層する雲が舞が流れていく。雲は青

い。どこまでも。

人生最初の風景——僕は目をこらして、そこから

何かの意味を読み取ろうとした。ちゃんとした顔の

通った顔か。でもそれは無駄な努力に終わった。

次に僕は、車の内部に目をやった。

乗用車は、四人乗りのセダン。黒と灰色の内装。

やめかいシート。僕が座っているのは、まだ新し

おかしな顔はひとつだけ。

「……この手には、見覚えがない。」

手だけじゃない。顔にも、ズボンにも、靴にも、この車にも、服装にも。

僕は何故ここに居るのだろうか。

僕は誰だ？

「あー、起きたぞ？」

運転席から明るい声が出た。女性の声だ。

「神代かイカ君、だっけ？ 着って大層ねえ。」

女性に顔を半分だけこちらに向けて微笑んだ。

「私は、これまで7回にっすハイカーを乗ったこと

があるぜ。あなただけ人間。でも、目的地も言わず

に落ちやうとはあなたが1人目よ。よく眠れたら？」

それが自分に向けられた言葉だと気付くまでに、

数秒かかった。何か過事をしたほうがいいのだろう

と気が付くまでに、もう数秒かかった。

「さあ……」

耳元で声が出た。頼りない声だ。それが自分の声

だと気付くのに、また数秒かかった。もちろん聞き

覚えはない。

「しっかし自覚めたる目的地を教えてね。このまま

じゃあな、私とどこまでもドライブすることにな

るわよ？ それも、人生、って感じで美しそうだけ

ど「女性が微笑んだ。耳のいいイヤリングが揺れた

ときに空の光を反射して、きらりと光った。

「その……質問したんですけど「僕は声を出した。

気が通まらないうちに、胸がはいわねにはいかない。

「何てもちろんだ？」

「神代かイカ君……もしかして、僕の名前ですか？」

「へ？」

女性に顔をあげて、一段高い声を出した。僕は女

性を見て、涙を流した。

「うーん……なるほど。そうきたか」運転席の女性

はしばらく長い顔をしていたが、やがて言った。

「実はね、あなたが目を置ましたら最初は何で言う

か、いろいろと手帳を立ててたの。でもその返事は

さすがに想像してなかったな。アイデア持ちって

やつ？ しかし真けて情いなし！ よくやった！」

女性にはにこり笑って言葉を切り、顔を向いた。

そのまま運転席に戻る。

僕は女性を見たまま、次の言葉を待った。

沈黙がゆくゆくりと、車内に降り積もっていった。

十秒、二十秒。

「……ねえ、この状況なに？」

おそれる女性が見えた。

「それは、たぶん……」

「すべった時のやつ？」

そういうのとはちょっと違うと思う。

「ねえ神代君。胸を承知で訊くんだけど……冗談

よね？」

女性にはちょっと黙っていた。何ひとつ聞かない僕

としては、いっしょに笑えるしかない。

「冗談とは……たぶん、違うと思います」おそれるお

それの僕は答える。

「本音、聞えないの？」

「名前も……ここどこかも、どうやってこの車に

乗ったかも、全部」

「ええ、本音で。まさか……記憶喪失でやつ？」

どうもしょう、記憶がない人を乗せた時の対応法

なんて、教壇で教わってないわよ？ え？ え？

と、うわ、どうして、どうもしょう！」徐々に

測りのブルースが上がっていく女性。「ねえ、何

も聞かぬ。エドムキッ？」訊かれて

「うーん、相手はバニッ？」

に静になるもの。たとえ聞かぬのがこころでも、

「えーと、でも」なんとか相手を海へ逃げようとし

て、僕は言った。「少なくともひとつ、助かった事

があります。神代かイカっていう名前」もしそれ

を覚えてもらってなかったら、さっともつと固った

事になったでしょう？」

「そうだけど」女性にはしばらく固った顔で顔を寄せて

いた。しかし僕の言葉が顔に染み込むにつれて、眉間の

皺は消えていった。「……まあ、そう言えなくもな

いか、そうね。名前が分かるのだから、車道に車が

かりナシだものね。危ないところだったわけね。私の

おかげ？ さすが、やるじゃない、ナイス。」

女性にはひとつで押さげないで自分を認めた。それ

から微笑んで言った。

「私は海軍少佐で、海軍、人類観念軍M、Mの特選

候補生よ。特選候補生っていうのは要するに、最も

優秀な候補生さね」

海軍さんは自分の胸あたりを指差した。革の水も

スターの中に、黒いつや消しの華装が入っている。

華装に「軍」





「それよりまずは証書喪失のことよ。本部に行つて、捜査員リストをあたりましたよ。自分の事が判らないうち、向もできないもの。証書照会判らないし、学校にも行けないし、背中もかけないし」僕は黒髪さんの発言について黙って考えをめぐらせた。それから手を上げて、自分の背中に向かってたたきつけた。ぽりぽり。

「……ごめん、冗談」

黒髪さんは何故か半し訳なまぶさな顔をした。

状況を判断する限り、僕はヒッチハイクでこの車に乗せてもらったらしい。気のいいこの女性が運転するこの車に。名前まで覚えて、

つまり一度はこの車に乗る瞬間には、まだ記憶を保持していた事になる。

「あー」

突然、運転しながら黒髪さんが車内に響く高い声を上げたので、僕は飛び上がった。

「な……何です？ 人でも驚きましたか？」

「通うわ、それは先月」

「え？」

「あれ聴しちゃった」黒髪さんは顔をしかめた。

「今から取り戻さるか……夢だったなあ、おれ神代君、悪いんだけど夢で通してもいい？ すみだから」

「無いまでも、もちろん一度は聞いた、おれに願っているのはこっちなのだから。」「でも、忘れ物って、何です？」

黒髪さんは片目を閉じて、黙然とぽく笑った。

「お母様」

\*\*\*

「遅うそおい」

白い寝物の前で、「王立校の女の子が叫んでいた。

黒髪さんの運転する車は、三車線の広い幹線道路を挟んで少女の向かいに停まった。人通りはない。車通りもない。郊外のせいなのか、それとも他に理由でもあるのか、街全体がしんとしている。

運転席のウィンドウが閉いて、黒髪さんが顔を覗した。

「このんねニイナ。ちゅーっとかだけ聞いてたわら、遅くなっちゃった」運転席の内こうにいる少女に、すまなそうに笑いかける黒髪さん。

「その「ちゅーっ」とって、二時間のこと？」少女は髪を揺立てながら、ずんずん大股に運転を繰り返した。

「特捜課調査が聞いて呉れるわー！ どうせまたわたしの事なんか忘れて、野良猫三匹くらいいでも

消んでたんでしょ！」

「いやあ、いくらお恥でもそんな事しないわよ、三匹は悪いすぎ」

消んではいたんだ。

道路の向こうから歩いてきた少女は、車の前までやめて立ち止まった。腰に手を当て、髪を風になびかせる。

目が合った。

「おえ、その後部座席の正装がキ、遅う」

「それが「除い物」よ、神代カイル君」

「……どうも」

僕は少女の様子を見た。もっと正しく言えば、目が好付けになった。

その手は、

本来このくらい幼な頃の少女の手が持つ、細く真珠的な艶が伸びているはずの部分に――鈍色の機械だった。

手元の外側を金属板が覆っている訳じゃない。体の上とこれだけの数値がびびり響いたら、必ず人より太くなるはずだ。でもその子の機械の手はぽりぽりとしていた。関節部分には知らない機能的な機械がついていて、手足をのめらかに動かしている。

この子は――手足が機械なんだ。

少女は目を締め、車の中の機に操縦の「腕」をくね

たあと、何も言わずに車を降り込んで別半面に乗ら  
込んだ。

「この手は皆川ニイナ。ほらニイナ、神代君に授け  
しなさい」

皆川ニイナと呼ばれた女の手は、袖半面から張り  
胸に覆ひのほうを見た。まるで足の手い足を連綿で  
見つけた時のような顔だ。

「あんた、パン演ず、てはん演ず」  
「まづ」

裏面のわからない本意打ちの質問に、僕は面赤も  
つた。初対面の女の手って、そういう質問するもの  
なのだろうか？

女の手が暖むので、仕方なく僕は答えた。「自然な  
いけど……」たぶん、こはん顔のような気がする。かま  
「じゃあ車から降りて」ニイナは車でも通いぬよう  
な仕度をした。

「ごめん」僕は謝った。「ええと、実はパン演なんだ」  
「あそこ、わたしは、優美不斷ではっきりしない男  
が嫌い」演

機われてしまったらしい。

「ニイナ、初対面の人を敬重するのやめなさいって  
いつも言ってるでしょ」演美の言葉さんが困った  
顔で言った。「それに神代道、記憶喪失で自分の好  
きなものを憶えてないのよ」

「ふん、こんな奴、どの海の家でも倒されたいか  
訊いても一時間おびに決まって」ニイナは怖い  
顔で機械の指を動かしてから、ふと真顔になって言  
った。「……お嬢様さん」

「そろりみないの」

「そろりみないです」

「なに二人揃って他人事みたい面倒してんのよ。  
何、今虎は記憶喪失の男手招いたの？」ニイナ  
は揺さぶる顔ををした。「やめてよ南雲！ 捨てた給  
うのとはワケが違うのよ」

「確かに違うわねえ。神代君はちゃんとおぼけられて  
るから、座席でオシグロしない」

そう言って南雲さんは僕をちらと見た。「しませ  
ん！」と僕は言った。「……たぶん、と付け加えたら、  
二重に大変なことになりそうなので黙っていた。

「それに神代君は南雲の顔が好き。きっと良いことを  
持ち込んでくれるわ。だからおいかけて、小さい頃  
おばあちゃんが見たって夫と同じ本音だもの」

ニイナが顔をしかめた。「その次で嘘か、靴下  
と石鹸の味が大好きで、石鹸食べすぎて死んだ奴じ  
やなかった？」

おめお「それは……何て言うか、その、冗談です」  
南雲さんは車を急遽させた。ふんんと静かな音が  
して、風雨が壁面に流れはじめた。

僕は車の外の景色を見た。南雲ビルや小さな公  
園、飲食店、本屋さんなどが、風景の一部になって  
流れ去っていった。

そういうものの名前や、基本的な知識は忘れてい  
ないらしい。けど……

本屋という概念はどこで憶えたのか。飲食店に前  
に入ったのはいつなのか。自分の内面のほうに視線  
を向けてみても、かえってくるのは黒い瞳。たとえ  
ようのない虚無ばかりだった。僕は理由の分からな  
い喪失を感じ、身震いした。

「八軒前のハイパーエージェンシー、四輪駆動のトルク  
高は連シャフト、雪の上みたい走り心地のアプソ  
ーバー！ 個体だけじゃ、思い切って断りしてよか  
ったわあー」

車を新しくした理由がきくと、胸の奥で誰か涙を  
たせなんだらうけど……

「南雲は何かっていうと」「おしとやかにしなさい」  
「女の手らしくしなさい」って言うけど、南雲だっ  
て車が美人じゃない。人のこと言えるの？」

「あら、恥しいの、大人だから」

「出た。その言葉も悪い」ニイナは南雲さんを見るな  
がら漏づいた。「特種演美官だからって、純粋たい  
を演じないで、おえ、あんた信じられる？ 演美だ  
たら、おぼれたしにケー・中内らせようとしたのよ。  
それおめたし自身の誕生日に、ケーキ買ひ忘れたか  
らって理由で」

「それで、どうなったの？」と僕は訊ねた。

ニイナは機械の手を僕に見せ、指を握ったり開い  
たりした。

「決まってるじゃない。計画スアインから独立して番  
からふしと断れちゃったわ。あんなやわらかいモノヲ  
まく踏てる訳ないし」

料理が下手な女の子というなら分かるけど、料理  
道具を持つのが下手な女の子というのは珍しい。

「意外とおちちもこちよいなんだね」僕は冗談のつ  
もりで笑いがら言った。

ニイナは星雲の低い後頭でこちらを覗みながらう  
ぶやいた。

「もぎり喰ふめよ」

何を？



「やめなさいニイナ。困ってる人がいて、自分がその人を助けなきゃなんて状況、人生でそう困ってるわけじゃないのよ?」

南雲さんが困ったような顔で言った。ニイナはふてくされて道をしない。

たのしに僕は「そろそろニイナさん」と言ってきた。ニイナは機嫌の列を隠然しながら「超能力。人間の肌を這がすために必要能力は約30ギガ」と言った。できれば今頃またくない超能力者でした。

「ごめん南雲代。ニイナは戦争で二面戦をたくしててね……ねえニイナ。二面戦が起きてたからって、記憶喪失の子には関係ないじゃない。って思ったはずよ」

「こんな寂しい顔でババの顔しないで!」

いきなりニイナがダッシュボードを叩いて叫んだ。車体全体が震動でびりびり震えた。

そして耳が痛くなるような音だ。

記憶があれば、疑しみがあふ。疑しみがあふなら、命の危険の人間に見えたくない自分もあるだろう。どちらも今の僕にはないものだ。

「ニイナ」つい口を開いてしまった。「ごめん。僕なら大丈夫。もう降りると。遅くの夜まで降るしてもらえれば。僕は自分で何とかするから」

南雲さんとニイナは、僕の言葉を聞いて黙った。自分が何者かが分からない。どういう状況で行動し、何を行動規範としていたのかも判らない。だから、人との距離の取り方も分からない。

自分の軸が何もない面より人の状況で、他人との距離を決めるのはすごく難しい作業だ。ふらふらして誰かを傷つけるより、傷つけない距離まで離れたほうがいい。

「……文書？」ニイナが目を細め、首をかしげた。  
そして言った。

「文書って、何？」

「ア？」思わず僕はニイナを見た。文書が何かあって、そりゃあ、もちろん……」

「記憶喪失は確定ね」「南雲さんが困ったように笑った。「神代遺、文書はもうこの国にはないの。其の外を見てこらんなさい？」

僕は外の景色を見た。  
その時ちょうど南雲地が終わって、建物に隠れていた遠くの景色がいっせいに開けて見えた。

南へと進んでいたものは巨大な砲台だった。

大小さまざまな攻撃兵器が、都市と一体化していた。高度を走るモノレールの胴体には高射砲、ビルの屋上には機銃砲塔、遠くの山岳を斜めに切り取った遺跡地には対空ミサイルポッド、道路に並行して並ぶのは、戦術機の出発の高気圧カタパルトだ。

よく見れば商業ビルの外壁にはびっしりと防衛が重なり、道路をプロット進むごとに緊急避難用の地下エレベーターが設置されている。民家にもビルにも、あらゆる建物の屋上にはソナーレーダーと機銃探知センサーが備え付けられている。

「この領土自体が『敵』に対する防衛基地なの。甲斐県警本部都市『アラケン443』、私達M・Uが得る都市情報、人々の進退の希望上」  
「……」「敵」う、僕はオウム返しに続いた。

「私達人間が戦っている相手よ、名前の由来はともてい、衛星。そいつらが人間と戦うためだけに存在してゐる。彼らが滅びるか、人間が滅びるかしかない。中間はないの。だから『敵』」

「『敵』って……何者なんですか？」  
「それは誰にも答えられないの。……ひとつ確かに言えるのは、『敵』によって世界中ほとんどの国家が都市に滅ぼされてしまったって事。このままだと数年内に、残った人間も滅ぼされるでしょうね」

驚いた。「そんなに酷しいんですか？」  
どうやら状況は、僕がずっと想像したものの百倍くらい悪いらしい。

「なに月が見えるでしょう？」  
僕はその言葉で、窓の向こうにある空に目をやった。灰色の雲の谷間に、白く輝く太陽の月が見える。

見えるなんてものじゃない。  
「月が……あんなに綺麗に」

白い月が、月のど真ん中に置かれていた。そのサイズはほとんど手の平分なくを握りこめるほどで、今にも雲の隙を突き破ってこちらに落ちてきそうなのに、「かつて『敵』が実行した作戦、大暴下、の名残よ。奴らは月を落とすとしたの。幸い『世界最後の都市』にのみだけで落下は免れずで止されたけど、それは半月は地球に投げたまま、あやうくは軌道を公転してゐるわ」

月落下中戦う。世界最後の都市よ。  
僕の表情から疑問を察したのだろう。南雲さんは無言で説明を追加した。

「月落下中戦を止めたのは、ひとりの民間人だったそうよ。何の戦闘能力も持たない。非武装の民間人。それでつけた通称が『世界最後の救世主』。その

の最後の行方は知らないけど、今もきっと、どこかに……」

南雲さんの説明が窓の外をさまよった。視座の先、街角のどこかに、その救世主を探し求める文句に。

「ア、ない。『敵』をぶっ殺すのはおとどろきの救世主じゃないわ。生きてゐるわし通し」ニイナが機械の顔を振りしめた。

南雲さんは何か言いたそうにニイナを横目で見た。けど結局何も言わず、街並みに目をやって「……そうね」とだけ言った。

「おかし、救世主なんて絶対存在しない。いたらぶっ殺してやる」  
ニイナが金属の顔を振りしめた。その目には強い感情が宿っている。

その感情の理由が気になって、でも理解そのままだを尋ねるほど無遠慮にもなれず、僕がどう聞いかければいいのか考えようとした。そのとき。

都市にサイレンが鳴り響いた。  
毎年の光がぶつり消えた。見通す限りの信号機が全てだ。道路にあった電子情報パネルがみんな消えて、代わりに赤い大きな文字で「警戒」と表示された。「特別警戒サイレン」南雲さんがさっと臉色を置えた。「嘘でしょ、こんな都市で？」

見える建物すべてに、次々と厚いシャッターが下りていった。物が引くみたいに。

「ニイナ、近距離無線システムで本部とのチャネルを開いて」

「もうやってるー」  
防衛隊のニイナが、ダッシュボードの中央にあるタッチパネルを指を動かしたしく操作した。

「職員、上着の袖の裏に縫着する。……おかしなコサ」  
ニイナが視座に設置のつべんを助いた。金属閉  
士がつかめる固い音がした。  
「縫はすわよー！ 神代君、シートベルトしてー」  
「さあ？ うわわっ」

南雲さんが叫ぶのと同時に、ものすごい加速に体  
が押しつけられた。車のエンジンが轟音をあげ、車  
が急加速する。

例が起きているか聞いてかかる暇もない。

「ニイナ、神代君、両面警戒！ 何とか基地まで逃  
げ逃るわよー」

警備サイレンが鳴り響く間隙も、車両は加速しな  
がら走った。他の車が走っていればあつという間に  
追突する速度にだけ、道路に他の車の影はない。

両面警戒？ でも……警備で、一体何が起るんだ？  
何を警戒しているか分からないまま、僅は車のサイ  
ズとカラーを暗念した。映った視座に目をこらす。

突然、エコーに映った景色が半分に割れた。

見んできた何かが見えろを中央で切斷したのだ。

甲高い音とともに、切り落とされたカラーの端が上  
に転がり壁方にまわっていく。

「両面警戒！ 右の建物後方」ニイナが指差しを繰り返す。

どろの正面に、何か黒いものがへばりついていた。

一瞬、視座がとどろいた。でも違った。大きくする

六角形をした金属製のボディから、見えない細

長い脚が八本生えている。それぞれの長さや太

さの異なるものはありそうだ。動く突つたその脚を

どろの正面に突き刺して、壁を壁に突きつけた。

脚を動かしたら、この車を壁に思くするくらいのス  
イズはあるだろう。

「警備に接続の『黒い機械』！ 隠下げなさい、あ  
いつらの時刻は押入れより速いわよー」

南雲さんが叫ぶと同時に、機械が鋭い細色の何か  
を射出してきた。南雲さんがハンドルを切ると、車を  
蛇行させて回避する。

アスファルトに鋭利な刃物が突き刺さった。あ  
れがナイフとカラーを切斷したのか。

黒い機械のような怪物は、機材を走らせようように前進  
してきた。建物の壁や壁、地面を次々に飛び降りな  
がら、車力など存在しないみたいだに車と衝突している。

「気を付けて、たぶん二匹にやない！」

南雲さんの叫ぶのとほぼ同時に、遠く後方の景色  
にそいつらが見えた。交通路の何ところ、民家の屋根  
の上——二匹や三匹にやない。

「うにやうにやいます！ 僕は叫んだ。

警備と呼ばれた黒い機械たちは、黒く長い

八本の脚を機械のように規則正しく動かしながら、

高速で走行する車に接近を迫るをかけてきた。

十数匹の黒い機械が幾層も次々に射出された。車のす  
ぐ後ろのアスファルトが、突き立った無数の足跡の  
せいで顔色の車道みだりになった。

車体にも何本か突き刺さり、金属がこすれる耳障  
りな音が響いた。

「うざやあー！ 前進したばかりのつるつるボディが

イが……」南雲さんが、自分が刺されたみたいなの

悲鳴を声をあげた。

「全速退けてよう両面警戒！ タイヤに刺さったりでもし

たら最悪、おとし車や員機がこられるやうんだぞら！」

突然に、道路から突如、黒い大機械が一匹飛び出  
してきた。車の視座を遮るように立ちはだかる。

「両面警戒！」

機械が中央の視座から前方を射出した。この距  
離にや射けてやうがない！

「隠下げてー」

南雲さんの叫び声と同時に、前方が車の前面ガラス  
を貫通した。破片を吹き飛ばし、車の目のすぐ横を  
駆け抜く。後部ガラスまで貫いて後方に弾け飛く。

警備で待たされた前部ガラスが、車内にうまうま  
りたいた。後部は必死で盾を上げ、破片が顔を穿た

「この黒い機械……よくぞ私のゴキゲン斬車を！」

南雲さんは叫びながら、誰のクルマスターから撃た  
れた。

南雲さんは左手でハンドルを握ったまま、右手で  
クルマスターの自動撃撃を聞いた。そして前方めがけ  
て撃ちまくった。

機械の脚部に弾丸が命中した。脚が二本ほど半ば  
から折れ、大機械がバランスを崩した。

そこに南雲さんの後部を車が斜めに体当たりした。

加速されたフロントバンパーが車中下部に衝突した。

壁がひびき、黒いガラスのような破片が飛び散った。

「次から道路を渡る時は左右確認なさい！」

「嘘、両面警戒完全に無きに行ったでしよー」ニイナ

が悲鳴まじりの怒り声をあげた。「こんな車に乗っ

てたら命が置換あつても足りないわい！」

黒い機械と衝突しながら、車は人気のない車道を別  
風景を舞って駆け抜けた。

やがて前方に、海岸の岸壁に沿うように建造され

た壁が見えてきた。

高い壁。壁が、丘を斜めに切斷している壁に直行  
して、橋の構造が隠れている。

橋の両側に並んだ主婦から、斜めに鋼鉄ゲートルが伸びて橋桁を支え持っている。鋼鉄橋というのだらうか。右に三車線、中央分離帯を隔んで左に三車線、いりばんに近い側には、車軌、道路の車高軌道が続いている。ここも他の車の気配はない。街道の車が橋まで進み勢がたつとき、鋼鉄たちの流走が変化して、十四呎上はいる車がいずれも制動をかけた、走行を停止したのだ。橋の付け根あたりから白い塵粉を飛ばしてくるものの、それ以上遠いにかけてくる気配はない。

そして一瞬、また一瞬と橋から離れていった。

「坂道、帰っていきまーす」

「返り切ったみたいぬ」

僕は別れたガラス、それに後方に遠くなっていく車輪の影を見つめた。後継部のあたりが過度の緊張で痺れたみたいになっていた。

「でも……どうして急に攻撃をやめたんでしょう」

「二番」にも無差別に人類を襲う敵と、中継からの指令で機能的に動く奴がいるわ。あいつらの作戦領域から外れたから戻ったんでしよう。調査さんは車道をもみスターに戻しながら怒ってます。

無差別は橋の肉の黄色に隠れ、やがて見えなくなつた。それを見ながら、僕は黙って考えた。

作戦領域から外れたから、きっとその通りなのだろう。調査のたけの橋に「二番」の事が分かるはずがない。だから調査さんの言う事はうが正しいのだらう。

だけと、ずっと前方を見て運動している調査さんは、僕のように後部座席からずっと後ろを見て、奴らを観察していた訳じゃない。だからひとつの疑念が僕の頭から消えなかつた。

——気のせいだろうか。無差別たちが、僕でて逃げていったように見えたのは、

「いずれにしても、彼等を本部に連絡しないこと。」

ニイナ、調査はまだ解がらないか？」

「でんで結局、直接本部に行くべきやなそう」ニイナはダッシュボードのタッチパネルを操作しながら書きた。

「参ったわね。次の調査が来たら、平時の武備じゃどうしようもないわよ。例とか本部まで……」

そのとき、車両が緩に揺れた。

とっさに、何かを掴みつけたのかと思つた。大きなものの上にタイヤが乗り上げたのかと。でも違った。

地面が、橋が揺れたのだ。

再度、同じ衝撃が車体を突き上げた。今度はもっと強い。車体の外の構造に、隠された衝撃が連続的に伝はれていく。

「な——何？」ニイナが言った。

「……やばいわ——調査さんが低い声でつぶやいた。その指はハンドルを強く握りしめ、強

の関節が白くなっている。「神代、ニイナ、周囲監視して、何か見つけたら、大急ぎでそいつと遠方

内に逃げろなよ」

「警報？」何かが、一瞬……。

ふと、車内に影が差した。

僕は海のほう、振り返の透明かりを通つた何かを見た。

調査さんは閉まつていた。周囲監視する必要なんで

なかつた。そいつはもう、すぐ目の前にいたからだ。

橋桁の下から巨大な影が顔を出し、こちらを見て

いた。

何の影かと問われれば、調査の——本気で頭

に迷いかちしれない。けれど本気で同じなのは、突

つた真、九い機、頭を覆う黄色の体毛くらいだ。何よ

う体毛が通いすぎる。右耳から太さまで、骨にまで

トルはあふ。顔の骨が無様に並んだ横長の口唇は、

この車を容れずぐと呑み込んでしまふぞうだ。

屋下から後ろ脚で立ち上がり、橋の上に顔だけ見

せているのだらう。橋に隠れた顔から下の部分がど

れほどの巨大なのか、想像もつかない。

人間の顔ほどもある顔が右に三つ、左に三つ。ど

れも血のように赤い。

六つの紅蓮の巨王がざらりと回転した。視界が

車を通っている。

調査さんが車を止めて、アタセルを思い切り踏み

込んだ。

タイヤがアスファルトをこすって卑しい摩擦音を

上げた。車体が路面を蹴って急加速。

その直後、怪物は巨大な口唇を上下に開いて、そ

のまま——

橋下に落ちていった。

すさまじい速度が橋桁を上下から破壊する。柱の

ような骨が橋を貫通し、鉄筋とアスファルトの混合

建築材をうエハースみたいに噛み砕いていく。

噛みつき攻撃、と噂にはあつたにもスゲールの

通いすぎる圧搾破壊は、車両はぎりぎりのところで

回避した。砕かれたアスファルト片と鉄骨片が、車

のリアサイドに降り注ぐ。



戦艦にタイサを取られながらも、車は陸面を駆け出した。

「なに？何ですかあれは!?」僕は思わず叫んだ。

「知らないで！ 舌噛むわよ！」南雲さんが叫び返した。

僕は黙って後方を見たら、離れかち面の気が引いた。西大質量の怪物が機に前脚の爪を突き立て、機の上にはよじ登ろうとしていた。

西航が体を機面の上に載せていく、あまりの質量に機面が揺動をあげていた。機を支えるゲープルが列車も引きちぎれて地上を暴れる。

機の上から完全に姿を隠したという時は、地球上のどの動物とも似ていなかった。

六本ある脚はそれぞれ象の脚ほど太くもある。流線型の体躯はびしりと剛毛に覆われている。特に背中には長く長い針毛が密生して針山のようになっているが、それぞれの針が揺れかち思うような太さで長さだ。両側にある呼吸口からは、濁った白色の蒸気が噴き出して、それは本気でというより山嵐の風

勢に近かった。ただし、その巨大さだけだとどんな生物にも似ていない。体の輪だけで、六重輪ある車道をほぼ占拠してしまっている。

山嵐の怪物は一步を踏み出した。足が陸面を突き破り、アスファルトに放射状の亀裂が入る。

その直後に開裂された光景は、勇歩としか呼びようがなかった。副財がアスファルトを踏み割るながら、車を加速してきたのだ。

「追ってください！ すこい速さだ！」

「副財様よ！」南雲さんが叫んだ。「それもビグメルル踏える……何でこと、あれは片腕（天狗足）だわ！」

「なんて（怪入り）がこんな所に……!?」ニイナが消え入りそうな表情をあげた。

その瞬間、怪物が瞬時に。

後方を見た機に、恐怖感と踏まれた、副財が冷たく凍れるような感覚が襲った。

一瞬、怪物が羽太のあとを追った。けど通った。怪物がすさまじい賢みで陸面を走り、空中に飛躍したのだ。

僕は空中のそのつを見過した。

落下してくる西大質量の陸面。

落下の速度そのままに、怪物が前足を振りかぶった。車を叩き潰す気だ。長い爪がきらりと光った。

死神の鎌のような爪が車庫車の後部をすくめた。車体の端がみずかに切り取られた。甲高い音とともに車体が震え、火花が散った。

けれど本日の意識はそれからだった。

落下してきた機めよるような怪物が機面に衝突した！

機がたわみ、支脚ゲープルが何本も引きちぎれていく。陸面がトラランがリンのように連打する。車体は雪を氷いた。車内にいる僕たちは、手近なものに握まって身を固くする以外にどうすることもできない。

車の下で大きく連打った陸面は、やがて怪物の激震地点を中心に、同心円状に破壊されはじめた。

車内は破壊のはじまる陸面に衝突するように震動した。副財がバウンスしながらも、唇が熱くしていく陸面を覗いて面へと駆け出していく。

「落ちるかあああああ！」高温でザアチンガしながら南雲さんが叫んだ。

崩壊していく陸面に乗騎を喰われながらも、南雲さんの乗用車は躍躍する地面を駆け抜けた。直打つ陸面にハンドルを取られそうになるたび、南雲さんが乱暴な動作でハンドルを右に左に操縦し、車体のコントロールを振り回した。やがて震れる地面を直

い感じ、車は平行な道を加速する。

「すごい、生きてる！ 死んだおぼあちゃんが見えたわ！」南雲さんがやけっぱちのような声で叫んだ。

「おぼあちゃん、誰めかヤ腹目よ、って言ってる！ あと、ギアを口に入れてハンドルを小刻みに

に動かして時面を測しなさい。って言ってたー」お  
ばあちゃん達。

車の天井を見上げると、僕の真上に僕の車輪が走  
っていた。一面壁に天井の音が切り取られ、細長く  
空が狭んでいた。さっき怪物が机を揺さぶったとき  
も、天井の一部を机がかったのだ。車の加速でも  
う少しだけ遅かったら、僕は車体ごとまっすぐたつ  
に切断されていただろう。

僕は彼方を見た。怪物がそのまま機から落ちてい  
なく、落ちてくればと一瞬期待したが、それはど甘  
くはなかった。両腕は自分が衝突してつくり出した  
大穴から這い出してくるところだった。

僕は周囲を見渡した。  
「博重さん、前にトンネルがあります！ あれに入  
れば、仮の経路では通ってこれません！」

「簡単にいれたら、私もそこに住んでもいいわー」  
彼方からは再び彼走しはじめた両腕が通ってきて  
いる。距離からの揺り下ろしを外したことで、方針  
を速さ以上に変更したようだ。両腕と悪い癖の連  
きが、純度の高い透明な液を振りまいている。

防護するように博重さんはアアを上げ、アタセル  
を最大まで踏み込んだ。

揺れる機を車両と機体が摩擦する。両腕のエ  
ンジンが鳴り声をあげ、車が速度をあげていく。目  
撃との距離が、徐々に離れていった。

「引き離してきます！」

車道いを走るこの刻は、全長数キロにおよぶ  
直線道路だ。カーブによる減速がないこの条件下で  
は、走るために設計された人達の走行車の揺りか  
ぎ、規定する怪物よりわずか1秒で勝るらしい。

目指すトンネルまであと五百メートル程度。そこ  
に入れば、ひとまず敵は追跡を諦めるだろう。

しかし「敵」は僕の予測を上回る生物だった。  
振り返った彼方の路上に、怪物がいない。

「あいつ、洞の上に……」

喉を揺らめくようにして聴んだニイナの声で気が  
ついた。機体を上に向けてと、両腕が機を支えるH  
字面の主脚に駆け上がり、ついているところだった。外見  
からはとても想像のつかない、しなやかな身のこな  
しだ。機体の支柱に前後をかけ、機体をこもりに  
内けている。

怪物の背の針毛が爆発的に生長した。ただでさえ  
機のように尖い針が、何メートルも一気に伸ばした  
のだ。そのせいで、怪物の体格が一気に倍近くに聞  
れ上がったような錯覚を受ける。

「そんな……随でしょー」両腕さんがバツとミラーを  
覗き込んで驚った。「あれをややるつもり？」

同時に怪物が呼吸を止し、体が激震に動かし上がった。  
まさか……

カタパルト射台のような機体側面とともに、怪物が  
両腕の針毛が体から射出された。

「針を動かす出だ！ こっくに飛んできますー」

矢張り、という面影がある。矢が空を覆い尽くし、  
逃げ場もないほどにせいに射かけられている様子の  
ことだ。けれど僕たちの頭上を覆い尽くしている  
のは、矢ではなく機だった。それも音が聞こえる  
ほどの膨大な機。どんな神聖的な運動アタニッ  
タを持っても、瞬間なく動き詰めたれた機の間  
は逃げようがない。

「逃げられない……」ニイナが絶望的な声で言った。  
「逃げられない……」

どれか一本でも当たれば、針毛は車両を突きまで貫  
通し、地面に食い止めるだろう。運良くそれで即死  
しなかったとしても、逃いついで来た敵に噛み砕か  
れて終わりだ。

「おばあちゃん、もっかい力貸して！」

両腕さんがアアを最大まで上げ、アタセルを限界  
まで踏み込んだ。車両がさらに加速し、エンジンが  
獣の叫びをあげた。

ひび割れたアスファルトを蹴り立てながら、車両  
はトンネルの入口に接近した。

両腕の針が地上に垂直した。さらに両腕の針が直  
線で突き刺さる。道路に、トンネル正面の壁に、直  
に、山風に、次々に大穴を開けていく。  
逃い付かれる……

ついに機のとつが彼方をかすめて車体が揺れ  
た。けれど両腕さんは怯んだ表情も見せず、ただ決  
然と正面のトンネルだけを見据えていた。

地面に両腕の機が機体なく突き刺さる。その瞬間  
の瞬間、両腕さんの運転する車はトンネルの入口  
に弾丸のように突っ込んだ。

光線に弾丸が通のいていった。

(つづく)





イラストレーター：鳥羽 雨

メカニクデザイン: 貞松龍彦

両氏による、4コマ漫画載せちゃいます

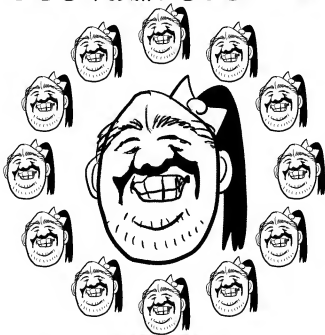


テーマはずばり「ギルドレの打ち合わせ」！！

漫画誌の中でぽつんと小説連載……  
のわりに賑やかな、チーム「ギルドレ」です。

# 毛魂一直線です!!!!!!!!!!

## よろしくお願いもます!!!!!!!!!!



毛魂一直線 毛魂

2014最強ギャグの呼び声「魔法少女俺」上下巻、大ヒット発売中!!(ふゅーじょんぷろだくと刊)  
コミック・ビーにてゾンビコメディ「わたしのあのこはいきしたい」好評連載中!!

**毛魂先生の新連載は12月頃開始予定だぜ!!!!!!!!**